

動労千葉第14回支部代表者会議開催

動労千葉は、九月一日、第十四回支部代表者会議を開催し、強制出向攻撃粉碎のスト権一票投票の圧倒的成功、動労水戸地本の決起の重要性、さらに十月の定期大会を含む今秋の闘いの意義について確認し、当面、スト権の確立を武器にして強制出向攻撃へ向け、日常的抵抗闘争を強化し、さらに「俺たちは鉄路に生きる」第三報の完成をもとに全国上映運動の拡大をかちとり、闘いの全国的広がりをかちとることを意志統一した。

団結力誇示する体制を固める

動労千葉が「4・1」以降、強制出向を中心とする大変な労働組合解体攻撃に、労働組合として極めて当然なかたちで決するたためにスト権の一票投票を初めて行った。

實際上、当局側の攻撃に対決する内容を秘めたスト権一票投票は、動労千葉が初めてであり、結果は各支部の奮闘により九〇%をこえる賛成を得て、内外に動労千葉の団結力を誇示しうる体制を固めた。これは、労働組合としての団結力を内外に明らかにすると同時に、資本・当局に対する大きな武器になっていくのである。

今後、さらに各支部の取り組みが重要になってくるのである。

一票投票の力にかけ反撃する

出向攻撃をめぐる状況は、東京で八月下旬に第四回目の出向攻撃があり、十人中九人が鉄道労連、一人が国労で、特に施設関係が中心になっている。東日本の中で、今まで大上段に振りか

ぶり無理を通し、国労を中心に強制出向を強行してきた。しかし、動労千葉のスト権一票投票を前後し、若干の状況が変わってきていることは明らかだ。もとよりわれわれは、一寸たりとも油断するものではない。スト権一票投票に示された動労千葉の団結力を背景に、生活実態、職場環境など様々な問題を全く無視して一方的に出向を強制してくるならば動労千葉はスト権一票投票の力にかけて反撃していく体制を堅持していくことが大切である。

鉄道労連内部の矛盾は解決しない

いまひとつ重要なことは、われわれが「4・1」以降、敵の最大の矛盾が鉄道労連にあり、その鉄道労連をパートナーとしてやっていくという中曽根の国鉄対策に最大の矛盾があると指摘してきたことだ。

鉄道労連から脱退し、会社当局のテコ入れでまたもとに戻るといふ茶番が行われ、昨日（八月三十一日）も鉄道労連の大会で、杉山というのが志摩にかわって会長になったが、内部にはらまれた矛盾と

いうのは全く解決しないのである。

スト権を武器に九月、十月を闘いぬけ！

関川前委員長の急逝を悼む

動労千葉初代委員長の関川幸氏は、長期療養中のところ薬石効なく、九月一日、二時四〇分逝去されました。享年六十一歳でした。

一九七三年勝浦大会において動労千葉地本執行委員長に就任され、それ以後も動労革マルとの組織攻防戦を最先頭で闘ってこられ、一九七九年三月には、動労「本部」から分離独立して動労千葉を結成し、初代委員長に就任されました。



83年の大会で退任の挨拶をする故関川前委員長。そして「81・3ジェットスト」を指導して動労千葉の名を全国に高め、一九八三

しかも、鉄労の問題以降、鉄道労連の主導権は動労革マルが握ったわけで、ずばり会社当局と中曽根が革マルという希代のファシストと手を結び、そしてそのことはJR各社の運営を行っていくうえに非常に大変な網渡りになっていくのだ。鉄労というクッションがなくなり大変な事態になっていっているのである。

水戸地本の決起を大事にし闘いの全国的拡大を

こういう状況の中、水戸地本が決起した。会社側の異常なまでの鉄道労連育成をはかるという現状の中で水戸地本は解散を拒否し、鉄道労連からの脱退、新組合を結成するということを決定した。

六〇〇名の仲間達の決起を大事にし、動労千葉としてもできるかぎりバックアップしていかねばならない。水戸・千葉が手を結び一緒に進んでいく、そうした時われわれの運動も前進していくのである。

さらに、動労千葉も定期大会を十月十六・十七日に設定した。この過程で出向攻撃と対決するため今までの体質を思いきって脱却し、民間の労働組合として基盤を確立しなければならぬ。あわせて財政基盤を確立していかなければならない。

九月から十月が動労千葉として重要な時期になる以上、具体的取り組みを全力でやっていこう。

年十一月に執行委員長の席をしりぞかれて以降も全国を飛び回り、三里塚闘争の重要性を訴え、動労千葉の闘いの全国的広がりに多大な貢献をされました。四月一日、分割・民営化が強行され、動労千葉の闘いもこれからという時、その勝利を見ることなく斃れたことは全く無念極まりないと思います。

われわれは、関川前委員長の意志を引き継ぎこれからも闘い続けるものです。これからも動労千葉の闘いを見守り続けて下さい。

合掌

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！